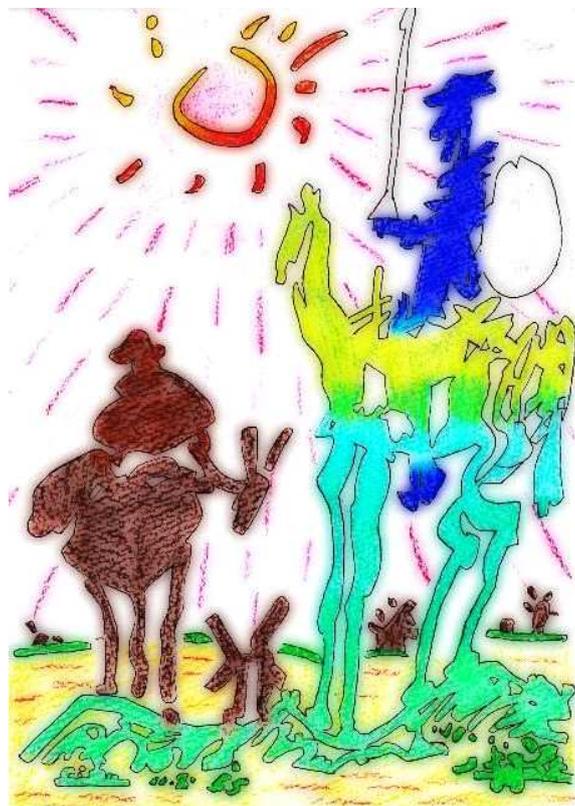


「愛」となる解決法

2022/03/08



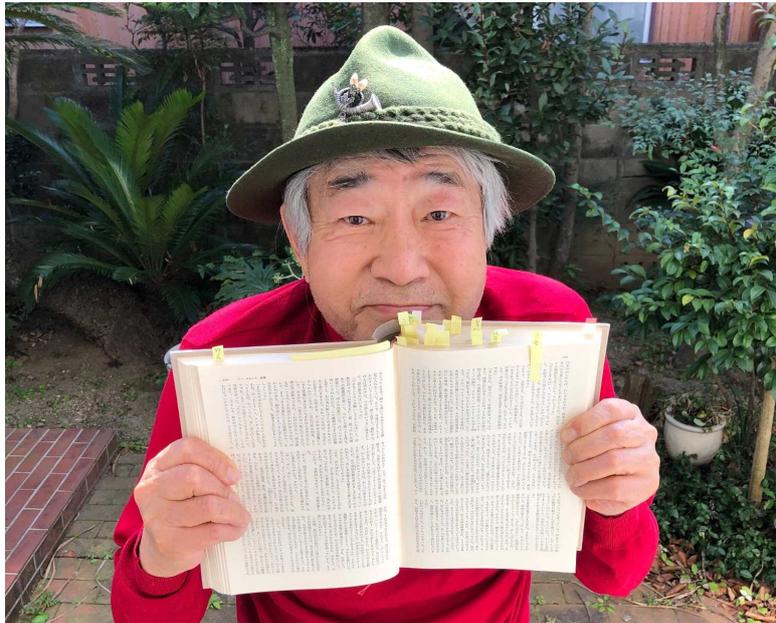
プラトンの『国家』を読了した塩見治人先生が次に向かったのが、セルバンテスの長編小説『ドン・キホーテ』でした。

ついに『ドン・キホーテ』にすすみ、会田由訳の筑摩世界古典文学全集で「前編・後編」に挑戦しています。この訳がいいですね。大学時代に読んだのはこれです。

そうです、この会田由(ゆう)訳の筑摩世界古典文学全集の『ドン・キホーテ』は、絶品です。私も、大学時代に買って持っています。

でも、この筑摩世界古典文学全集の『ドン・キホーテ』前編・後編合冊本は、なんと、全部で、本文も、解説も、注釈も入れて、732頁もあります。また、写真のように1頁が3段になっていて、とてもじゃない、大量の分量です。さあ、大変です。果たして生きている内に読み切れるでしょうか。塩見治人先生、大丈夫ですか？ でも、大丈夫、読んでいくと、「巻(かん)、措(お)く能(あた)わざるもの」で、読み出したら止まりません。セルバンテスの痛快な語り口と会田由さんの縦横無尽な訳に心を奪われて、面白くて、面白くて、

痛快で、滑稽で、ドン・キホーテとサンチョ・パンサの凸凹コンビの旅物語りに、個性的な登場人物が次から次へと現れて、奇妙奇天烈(きみょうきてれつ)な振る舞いをします。それが、王さまや高位の貴族や美しいお姫さまであったり、ずる賢い農民であったり、美しい娘と心優しい若者であったり、羨ましいほどの愛の物語が展開されたり、悲劇に終わったり、千変万化、興味津々、次から次へと読み進めざるを得ません。寝食を忘れて読みふけることになります。塩見治人先生、睡眠とお食事はとってください。私は、もう、一通り読み終わりました。いまは、みなさま方に、この希代の小説の魅力をお伝えしたいと読み返している最中です。



この全集版には、嬉しいことに、「前編」と「後編」が合冊されています。優れた長編小説が優れているのは、すべてが、前編も、後篇も、共に優れていることです。トルストイの『戦争と平和』も、滝沢馬琴の『八犬伝』も、『太平記』も、すべて、後篇も面白いのです。特に、『ドン・キホーテ』の後篇は、ある島の太守となった従者のサンチョ・パンサが大活躍する、「滑稽譚」(こっけいたん)として面白いのです。剽軽(ひょうきん)な農民で貧乏騎士の従者に過ぎない田舎出のさえない男が、一国一城の太守さまのなったのですから、世間の剽軽で農民で貧乏人の従者に過ぎない田舎出のさえない男たちは、面白くありません。なんとか、サンチョの化けの皮をはがそうと、あれこれ、イジメを開始します。

愛の判断

あるとき、一人の男がサンチョの島にやってきました。悪人どもが差し向けた「刺客」です。このサンチョの島には不思議な掟があって、島へやってくる者はだれでも、なにをしにきたか、その目的を告げなければなりません。「ウソをいったら絞首刑にする」と言うものでした。[全集版:後篇第51章570頁]

その男は、「俺は絞首刑になりに来た」といって橋を渡ってドンドン島へ入ってきてしまいました。門番が慌てて、「絞首刑になりに来たとは不届きな奴だ！絞首刑にしてやる」といって捕まえて、裁判官のところへ連れていきました。裁判官も怒って、「絞首刑になりに来たとは、この嘘つき者めが！絞首刑にしてやる！」と判決を下そうとしましたが、「はて？」と考えこんでしまいました。

「絞首刑になりに来た」という男を、ウソを言ったとして絞首刑にしたら、ウソを言ったことにならないので、絞首刑にできません。もし、絞首刑にしなかったなら、その男は絞首刑にならなかったのですからウソをいったことになり、絞首刑にしなければなりません — これが有名な「サンチョ・パンサのパラドックス」です。この見事にできた「パラドックス」（矛盾対立する論理）は、永久に解けません。だれが、なんと言っても解けません。手強い「刺客」がきたものです。

困った裁判官たちは、「これはもう、太守さまのご判断を仰ぐより仕方がない」とその男をサンチョのところへ連れてきました。さあ、これには、サンチョ・パンサも、困ってしまいました。この男を絞首刑にするか、それとも、この男を無罪放免にするか。難問が解けなくて、自分が「絞首刑」どうよう、太守を「馘」（くび）になるか……です。

サンチョは判決を下します。サンチョはいいました — 「お前たち知恵者が、どう考えても解けないのなら、私に解けるわけがない。ただ、私のご主人のドン・キホーテさまが、いつもおっしゃっていたことがある — 考えに困ったら、結果が、『愛』となるようにしなさい。それで、わたしはこの男を許してやろうと思う」。サンチョはこの男を家に帰してやりました。

なんとまあ！絶対に解けない「パラドックス」を、サンチョは見事に解いて見せたのです。それも、「頭」ではなく、次元がもう一段違う「心」で…。ここでドン・キホーテがいう「愛」とは、「ウィーン=ウィーン」のことです。だれ一人犠牲にならないように、みんなが幸せになることが「愛の解決法」です。サンチョは、このだれにも解けない問題を、その結果が「愛」となるように、罪人や悪人や死人や不幸な者が出ない解決を考えたのです。見事です。これが、長編小説『ドン・キホーテ』で、セルバンテスが伝えたかったことの一つです。

「醜女」(しこめ:不美人の女)を詳しく描くセルバンテス — 「東洋の真珠、野に咲いた花!」

あるところでは、(別のエッセイ「美人と天才を擁護するドン・キホーテ」をご覧ください) 「美人」を擁護したセルバンテスですが、今度は、「醜女」を登場させます。これも、「小説」が果たす役割かどうかは分かりません。微に入り、細に入って、「醜女」を滑稽に描いて見せます。先の「美人」から今回の「醜女」まで、自由自裁に、女性の容姿・容貌を描いて見せます。[全集版:後篇第47章548頁]

この場面でもまた、太守になったサンチョ・パンサをからかうために雇われた農民があらわれます。今度の農民役はなかなかの芸達者で、最初からとぼけて見せます。入ってくるなり、「どなたが、太守さまで？」と辺りを見回します。部屋の中央に、立っている家来たちを周りに集めて、一人、椅子に座ってデンと構えている恰幅の良いサンチョ・パンサが、当然、太守であることは分かっているのです。

「どなたがってことがあるかね」と秘書役が答えた。「椅子に腰をおろしておいでの方でなくってさ？」

農民は、名前もはっきり言わず、出身地もあいまいで、サンチョ・パンサは、最初から疑ってかかっています。

農民は、太守さまに、「今度、息子が、大金持ちの百姓アンドレアス・ベルリーノの娘でクララ・ベルリーナと結婚したいので、息子の推薦状を書いてもらいたい」というのです。

「相手の娘は、まあ、東洋の真珠みたいで、右側から見たら、まるで野に咲いた花そっくりでさ。左から見たら、それほどでもねえで…」

それから、娘の容貌と容姿について、滔々としゃべりだします。それがまた、たいへんな娘なのです。よくここまで、酷く言えたものです。

「それちゅうのが、天然痘でとび出しちゃって、そっちの眼がなかったからでさ。それに、顔のあばたもたくさんあって、ずいぶんと大きいもんでがすが、あの娘を好きな男たちや、ありやけっしてあばたじゃねえ、あの娘を愛する男たちの魂がいかる墓穴(はかあな)だなんて言ってますだ。あの娘っ子は、とてもきれい好きだもんで、顔をよごさねえようにと、鼻を、世間でよく言うように、上へたくし上げているもんで、どう見ても鼻の穴が口から逃げようとしているとしか見えねえでがす。しかし、それでも、とても見ばえのいい娘っ子でがすよ、それというのが、でっげえ口をしているもんで、もし十本かそこらの前歯と奥歯が欠けてさえいなかったら、およそ形のととのった口とくらべても、負けるどころか、上廻ることだってできたでがしょうな。あの娘の唇についちゃ、わしゃ、言うこたねえだ。なにしろ、おそろしく薄い細っこい唇でがすから、唇を械(かせ)にとることがはやったら、この唇で一械の糸が作れるかもしれねえぐらいでさ。ただ、ふつう唇によく見かけるような色とはちがった色をしているだで嘘みてえでがす。なにしろ青だの緑だの、茄子色だのの斑(ぶち)入りだからね」

農夫は、さんざん、容姿と容貌をあからさまに酷く語りますが、決して、本人そのものを悪くは言いません。返って、誉めるのです。話のなかに出てくる「得業士」(とぎょうし)とは、ドイツ語で「Diplom」で大学卒業の学位を持った者のことをいいます。

「ところで、太守さま、とどのつまりは、わしの嫁になる娘っ子のいいところを、こねえに細々と述べたてようとしたところで、どうか大目に見ておくんせえよ。わしゃ、あの娘っ子が気に入っているだし、みっともねえとはおもってねえだからね」

「おめえさんの好きなだけ述べたてな」サンチョ・パンサが言った。「なぜっていや、お前さんの娘っ子の顔形の細々した話を聞いて、たのしい思いをしているだから。もしこれで、わしが昼飯をすましていたら、お前さんの描いてみせる顔話よりうめえ食後の菓子はなかったかしれねえよ」

「その食後の菓子はまだまだ、さきのこってがす」と、百姓が答えた。「けんど、今のところ都合が悪かろうと、いずれ工合のいい時期が来るでしようって。そこで、申し上げるだが、お前さま、もしあの娘っ子のからだつきの、上品ですらったところを、限に見えるようにお話しできたら、それこそ、驚きもんでがしようが。何ちっても娘っ子のからだだが、ひでえ猫背でちぢかまって、口と膝がくっついてるもんだで、そいつができねえでがす。それでも、もしもあの娘が立ち上がることができたら、頭を天井にぶっつけるにちがいねえってこた、誰にもわかるこってさ。それに、あの娘っ子はできることなら、わしの倅の得業士に、どうの昔妻となるために手を差し出していたはずでがしようが、ありようは手がちぢかまっているだで、そいつを伸ばすことができねえでがすよ。それに、なんちつたところで、あいつの長いそっくり返った爪を見ると、あの娘っ子の心のやさしさと、造作の美しいことがありあり現われていますだ」

「わかっただよ」と、サンチョが言った。「兄さん、お前さんはその娘っ子の足の爪先から頭のとっぺんまで、細々と描いてみせたことを勘定に入れるこった。そこで、今度はどうしてもらおうというんだね？ 廻り道やら、横町やら、はんば切れやら、つけ加えはいっさい抜きにして、話の眼目にはいるこった」

「できることならお願いしてえことは」と、百姓が言った。「お前さまに一筆、娘っ子の父親あての推薦状を書いて、なにしろ娘っ子も倅も、財産にしろ、兩人の性質にしろ、けっして不釣合いじゃねえだから、この縁組ができれば結構と思うと、あの男に頼んでくださるとありがてえと思にきますだ。それってえのが、本当のことを言うと、太守さま、わしの倅めは悪魔にとりつかれているでね、一日に三度か四度、よこしまな悪魔にせめさいなまれねえ日はねえくらいで、おまけに、一度火の車へ転んだもんだで、顔は羊皮紙みてえに、しわだらけだし、両の眼も泣いてるみてえに涙がかわかねえでがす。けんど、まるっきり天使みてえな性質の子で、われとわが身を、棒で叩いたり、さんざんになぐる苦行をしねえでも、聖者さまになるこってがしようって」

この倅も、娘と負けず劣らぬ、それ相当の容姿と容貌を兼ね備えているのです。

「まだそのはほかにしてもらいてえことがあるだかね、おっさん！」と、サンチョが答えた。

「どうもね、ちっとべえ、言い出しにくくなけりやあ、もう一つお願いしてえもんだね」と、百姓が言った。「だが、やっちまえ！ とどのつまり、このまんま、胸の中でくさらしておくわけにやいかねえだからね、どうなろうと、かまったこたあねえ！ じゃ、言っちまうだが、殿さま、お前さまはわしの倅の得業士の結婚費の足し前として、三百ドゥカードか六百ドゥカードの金を、わしに恵んでもらいてえもんでがす。わしの言いてえのは、あいつに家をあてがう足し前のためちゅうこってがす。それっていうのが、あの舅姑(しゅうと)夫婦の厚かましさに苦しめられねえで、若い老夫婦は夫婦きりで暮らさなきゃならねえからでがすよ」

「まだ、何かほかに、してもらいてえことがあるかどうか、よく考えてみな」と、サンチョが言った。「それに、工合が悪いとか、気がひけるとかで、言わねえでおくこたあねえだよ」

「いんにゃ、全然ねえでがす」と、百姓が答えた。

結局、お金をゆすりに来たのです。こういったパンサ太守攻略の役者たちが、入れ替わり立ち代わりあらわれては、知恵者のサンチョ・パンサをだまそうというのですから、たまったものではありません。ついにたまりかねて、いかな我慢強いサンチョ・パンサでも怒り出しました。

そして、相手がこう言ったか言わない時、太守はすつくと立ちあがって、それまで腰かけていた椅子をつかんで、どなった。

「やい、やい、やい！ この田舎っぺえの、脳足りんの、ドン・ドン百姓めが、おめえがこっから立ち去って、さっさと、おらの眼の届かねえどこへ身をおくさねえちゅうなら、この椅子でおめえを叩きこわして、ど頭をぶち割ってくれるだ！ 淫売の餓鬼、悪党、悪魔の絵かき野郎め、しかも、こんな時刻に、おらに六百ドゥカードの金を無心に来たちゅうのか？ それで、どこに、おいらが、そんな大金を持っているだね、屁っぶり虫めで、たとえ、おらがその金を持ってたところでよ、何だってそいつを、おめえに、くれなきゃならねえだ。抜け目のねえ、知恵足らずめが？ それでよ、ミゲル・トゥルラがよ、ベルリーネスの家柄がよ、おらに何だちゅうだね？ おらの前から失せろと、おらは言ってるだ。それがいやなら、わしの主人公爵さまのご生涯にかけても、おらが言ったことを、そのまんまするだけよ。おまはんがミゲル・トゥルラの者ちゅうことがあるもんか、それより地獄がわしを誘惑しようとおめえを遣わし

た、どこかの悪党に相違ねえ！ さあ、白状しろ、ここな人でなしめ、わしが太守の職について、まだ一日半しきやたたねえのに、おめえは、おらが六百ドヴカードの金を持っていると、もう思っているのか！」

この時、給仕頭が百姓に、広間から立ち去るように合図をしたので、当の百姓は頭を低くたれて、太守が怒りをそのまま実行にうつすのをいかにも怖がっているような様子をして、そのとおり退出したのであるが、このしたたか者は自分の役を、実に巧みに演ずることができたからである。

なんともまあ、大変な出来事です。なんともまあ、面白い話です。言うにこと欠いて、若い女性の容姿と容貌を、これでもか、これでもかと並べ立てて、新人の太守サンチョ・パンサを強請(ゆす)るのですから、なんともまあ、奇妙な話です。私たちも、喧嘩の最中に、相手を貶(けな)して、悪口雑言、ケチョンケチョンにやっつけるのはいいのですが、ここまで相手を悪く言えるのは、天才的な発想と経験があつてのことです。さすが、庶民的で、牧歌的で、血の気の多いドン・キホーテ・セルバンテスです。宮廷や貴族相手のシェイクスピアには出来ない相談であり、表現であり、描写です。これも、小説なのです。特に、この『ドン・キホーテ』が、スペインの「悪漢小説」(英: Picaresque novel、仏: Roman picaresque、西: Novela picaresca) の代表作だと言われる由縁です。

では、いよいよ、次は、ツルゲーネフの名評論『ハムレットとドン・キホーテ』に進みます。

都築正道